

地域教材を中核とする歴史学習への試み - その2 : 「加賀百万石」の教材化

著者	田中 武雄, 社会科教育研究グループ, 浅田 隆, 岩田 修一, 大西 賢一, 岡部 昌樹, 小幡 秀治, 木谷 恭孝, 新保 賢了, 砂田 武嗣, 端保 源太郎, 野田 大介, 花外 健男, 福原 俊夫, 細川 紀彦, 村本 外志雄, 屋敷 道明
雑誌名	教育工学研究 = Studies in educational technology
巻	8
ページ	1-24
発行年	1982-09-10
URL	http://hdl.handle.net/2297/24861

地域教材を中核とする歴史学習への試み

——その2「加賀百万石」の教材化——

田中 武雄* 社会科教育研究グループ**

I 研究のねらい

1 その1をうけて

昨年、「地域教材を中核とする歴史学習への試み」のテーマを掲げ、研究その1として「一向一揆」の教材化に取り組んだのは、次のような理由からであった。

新指導要領が実施され、地域学習の大切さが提唱されて以来、地理学習は子供が直接体験することにより、かなりの成果をあげているのに対し、歴史学習は旧態依然として、知識を一方的に与えるにとどまり、子供の学習意欲を失わせているという指摘や、さらには、6年生の歴史学習が、あたかも中学・高校の通史学習の縮小版ではないかという批判があった。

このような現状をふまえ、歴史学習においても、地域の事例をとりあげ、その時代に生きた人間を追究することにより、時代背景をイメージ豊かにとらえさせることを通して、子どもが楽しめるわかる歴史学習をめざすことができなまいらうかと考え、研究を継続したのであった。

その結果、次のような点が明確になってきた。

○史実の羅列になりがちな歴史学習を排除し、暖かい肌合いを子供に感じさせながら、当時の歴史の舞台を具体的にとらえることができるので、そこに生きた人々の苦しみや喜び、人間の生き方に迫ることができる。

○日本のそれぞれの地域に生きた人々の営みの息吹が感じられることにより、日本の歴史は地方史の集積の上に成り立っていること、つまり、地域史の大切さが見直される。

○なまなましい郷土の歴史の姿を遺跡・遺物・古文書・聞き取り等によって追究することで、郷土の歴史に強い関心をもつようになり、親近感をもって先人の業績に感動できる。

昨年度研究その1では、以上の利点とともに、いくつかの問題点も浮き彫りにされた。

すなわち、資料発掘はかなり成されたのであるが、文章資料が多く、内容も難解で教材化が困難なものも多かった。また、子供が自分の足で調査し、自分の目で確かめることができる資料に乏しかった。単元構成のどこに資料を位置づけるかという適時性の問題も課題として残された。とどのつまり、研究その1では、地域教

* 田中 武雄 金沢大学教育学部
 ** 浅田 隆 金沢市立長田町小学校
 岩田 修一 金沢市立味噌蔵町小学校
 大西 賢一 金沢市立緑小学校
 岡部 昌樹 金沢市立長田町小学校
 小幡 秀治 羽咋市立余喜小学校
 木谷 恭孝 金沢大学教育学部附属小学校
 新保 賢了 金沢市立木曳野小学校
 砂田 武嗣 金沢大学教育学部附属小学校

端保源太郎 金沢市立芳奇町小学校
 野田 大介 金沢市立野町小学校
 花外 健男 石川県教育センター
 福原 俊夫 金沢市立大徳小学校
 細川 紀彦 石川県教育委員会
 村本外志雄 金沢市教育委員会
 屋敷 道明 金沢大学教育学部附属小学校

材としての価値は見い出せたが、資料の発掘、再構成といった地域史の研究を土台においた実践が、我々の大きな課題であることが結論づけられたのである。

したがって、本年度の研究その2では、「加賀百万石」の教材化を図る一方、昨年度の反省に基づく、より一層密度の濃い研究をめざすことになった。

2 ねらいと手順

本研究では、身近な地域の素材である、「加賀百万石」を教材として取り上げ、これを中軸とした授業を展開することによって、江戸時代の特色をとらえさせることをねらった。その研究手順は次の6点である。

- ①加賀百万石の概要と性格を正しく把握する。
- ②従来の教材内容と地域素材を対応させる。
- ③加賀百万石の教材としての価値を検討する。
- ④目標の明確化を図り、資料を発掘する。
- ⑤加賀百万石を核とする単元構成を行う。
- ⑥授業を実践し、教材の評価を行う。

以上の手順の中に、昨年度の反省に基づく課題を重視し、その克服をめざすとともに、研究その1で明確になった、地域教材の利点をさらに追究し、定着させたいと考え、取り組んだ。

それはとりもなおさず、楽しくわかる授業のより高い研究への推進でもあり、身近な具体的事象を学習対象とすることによる観察や見学の可能性、子供の資料作りによる主体的な生き生きとした学習の展開を生むことにもつながるのである。地域に残る文化財や伝統に目を向けることによって、子供の認識の土台である地域に、より高い関心をもたせ、人間的な連帯を養うことにもなるであろう。

身近な地域の学習なるが故の特徴をさらに追究し、昨年度の研究にも増してより高い成果が得られることを確信し、研究その2に取り組んだ。

II 「加賀百万石」の教材化にあたって

1 加賀百万石の概要

(1) 加賀藩の成立

加越能三国を領有する加賀藩を、およそ270年(14代)にわたって支配する基礎を固めた前田利家は美濃国前田村の土豪の出身であった。利家の戦国武将としての発展は、戦国乱世を收拾し天下統一を推進した織田信長、豊臣秀吉に仕えたことによる。

それは、天正9年(1581)に信長より能登4郡(約23万石)を与えられたのが最初で、慶長5年(1600)に利長(2代藩主)が徳川家康より能美、江沼2郡を与えられ、三国12郡全てを領有する百万石大名となった。

いま、領有石高についてみると、寛文4年(1664)の領知状(表高)には、122万5020石余とあり、同高が慶応3年(1867)まで継続する。ところが、内高は寛文4年118万5000石余、正徳元年(1711)128万5000石余、さらに文政8年(1825)133万石余と増加し、新田開発が進んだことを裏づけているとも見られる。

(2) 幕藩体制と加賀藩

利家なき後の加賀藩は、慶長と寛永期に相継いで二度の危機に見舞われた。慶長4年(1559)2代藩主利長に、徳川家康暗殺の謀略があるとのデマから、家康が加賀征伐の気配を示した。翌年に成立した妥協の条件によって

- ① 利家夫人芳春院(利長の母)を人質として江戸へ下向させる——人質の第1号となった。
- ② 徳川秀忠の娘、珠姫を前田利常夫人として迎える——慶長6年前田家へ入興し、徳川家との政略結婚第1号となった。

この慶長の危機で、前田家は徳川家に屈することになった。

さらに、寛永8年(1631)3代藩主利常が徳川に謀反の流言が飛んだ。その発端は大阪の陣に対する藩士への追賞、船舶の購入や金沢城の改築に対するとがめであった。使者を遣わせて事なきを得たが、利常は江戸で鼻毛を伸ばして

アホ殿のふりをしていた。こうして、外様大藩ゆえの辛酸をなめ、徳川氏への臣従化を進めた。

(3) 藩政——改作法

藩財政の基盤は年貢米にあったから、農政はきわめて重視されていた。加賀藩で特筆される改作法は、利常による一大改革であり、農政の基本法であった。同法は、慶安4年に始まり、明暦2年に成就したとされている。この要点は、

- ①一村平均免とする——給人による知行所の直接支配をやめる。
- ②検地によって村の草高を決める。
- ③税率をひきあげ、定免法で固定する——他に夫銀、口米等（付加税）や小物成を決める。
- ④敷借米を容赦し、貸米、貸銀仕法をたてる。
- ⑤十村制度をととのえる。

同法は、5代藩主綱紀が継承し整備していった。また、十村制度（慶長9年創始）は加賀藩特有のもので、農民支配の末端機構に位置づけられていた。

さらに、③の定免法によって固定された税を各村に課す書面を「村御印」と言い、明暦2年「改作仕法」によって交付され、寛文10年に書き改められたもので、今日でも多くの村に残存している。これらによっても、非常に高率租税を定免法によって固定していたことがわかる。従って農民の抵抗も根強く、とりわけ、凶作年時には激しかったのである。

(4) 天保義民の事件

この事件は、凶作続きの天保期における農民の抵抗に対する藩の反動弾圧の代表的なものであった。それは、天保8年～9年にかけて、奥村政権が強行した天保の改革（藩権力をあげて百姓から年貢米収奪をはかり、藩財政の建直しをめざす）にそって弾圧した事件で、その悲惨さは格別であった。

こうした事件発生の背景には、徐々に推移していく社会の動きや経済の発展の方向に遅れをとり、時には逆行さえする幕藩体制の矛盾をさらけ出していると言えないだろうか。

(5) 藩の財政とその推移

藩の財政状況は、どうなっていたのか、いくつかに分けてみることにする。

①健全財政の時期——元禄、宝永期(1688～1710)

この時期には、先にふれた改作法の完成による農民からの高い収奪があったことや寛文10年（1670）の西廻海運の完成によるところが大きい。

いま、延宝期（1672～1680）で見ると、内高は、約130万石、内給人知行と社寺寄進高を除いた50万石を五公五民として、約25万石が貢祖高となり、百万石文化を築く基盤ともなっていた。

②赤字財政への転換期——宝暦、天明期（1750～1788）この時期に至ると、百姓一揆や打ちこわしが多発している。この赤字への引き金は、延享2年～宝暦3年の9年間に、宗辰、重熙、重靖の三人の藩主が相継いで死亡、その葬儀と相続儀礼に莫大な失費を重ねたことである。このため、明和期（1764～1772）や天保期（1830～1844）の藩債は、数年分～20年分位の収納銀高に相当したとも言われ、相当に深刻な財政危機を迎えていたようである。

(6) 豪商銭屋五兵衛

海運の発達によって、粟ヶ崎村の木屋藤右衛門、宮腰の銭屋五兵衛など北前船主たちが、大海商として頭角をあらわしてきた。

ところで、加賀藩が、年貢米を大阪登米として最初に移出したのは、寛永15年（1638）であるが、藩では、廻米船確保のため、あえてこれら大海商を利用せざるを得なかったのである。なかでも、一代にして巨額の財を蓄えた銭屋五兵衛は、藩から御手船裁許役を委任され、交易上、この役をフルに活用していったのである。

いま、五兵衛の海運の盛況ぶりを見ると、2500石積を4艘、1500石積6艘、1000石積8艘など230余艘を所有した。そして、江戸、大阪、函館など全国34港に支店を置くなど手広く交易して利益をあげたのである。

これとは対比的に財政が危機に直面している藩は、豪商たちの財政的援助にたよって、かろ

うじて藩財政のかじ取りをしていたのである。こうして、豪商たちは、藩のうしろだてで手広く商業活動を営む一方、窮乏する藩財政の大きな担い手でもあったのである。

2 教材化への概要

以上の手順と加賀藩のアウトラインにしたがって研究をすすめ、教材化を図っていったのであるが、地域史の研究を土台においた実践が必要であるという課題をはじめ、文章資料が多く内容が難解であったこと、子供が自分の足で調査し自分の目で確かめることが少なく子供の資料作りによる主体的な学習が弱かったこと、単元構成における資料の適時性等、昨年度の研究で問題点として残された課題の克服をも念頭においた。教材化の過程で検討されたことからの概要について述べる。

研究の手始めに、地域史としての加賀百万石について、史実を正しく把握するための研修をした。そのあらましについては、前項で述べたので、ここでは省略する。

次いで、従来の教材内容と地域素材を対応させる作業にとりかかった。6年生の歴史学習では、どんな内容を盛りこんできたのかを、できるだけ正確を期すため、中教・東書・日書・教出・学図の出版社の教科書をもとに調査した。大名統制・農民支配・鎖国・商人の力・農民の努力・一揆と改革・新しい学問・武士の政治のおわり・登場人物等の項目別に分類し、細部にわたって落ちのこないよう、教材の洗い出しをした。このような地味で根気強い分折作業の一方で、江戸時代の特色をもった地域素材として、どんなものがあるのか調べた。

加賀百万石の研修を下地に、その性格をつかみ、さらに、従来の教材内容と地域素材を対応させ、教材としての価値を検討した結果、加賀百万石の教材化には、村御印と村方二日読、天保義民、銭屋五兵衛を核にした研究の推進が特に必要であり、補助資料も含めた資料の分折や単元構成等の検討を十分に行えば、子供たちに

江戸時代の特色をとらえさせる学習が可能であるとの結論を得た。

この段階までくると、目標の明確化、資料の発掘、単元構成に到るまでの過程は、相互に関連しあって進められ、深められるので、それらの各々のことからは、後の項で詳しく述べたい。ここでは、あくまでも概略にとどめる。

学習としておさえるべき内容を次のように設定した。

加賀藩は外様大名として幕府の厳しい管理下におかれていた。一方、改作法にみられるように他の藩に先かけて、農業を基盤にした封建支配体制を固めていった。そのため、農民は重税に苦しんだばかりか、相い次ぐ凶作や物価の高騰にも苦しめられ一揆を起こすようになったが、藩は前にも増して圧迫した。財政難に苦しむ藩は銭屋五兵衛等の豪商に借金をするようになり、商人の力は強くなっていった。

このような学習のねらいは、前述の3つの核と深く関わり合って、単元構成の基を成している。その内容はおよそ次のようである。

まず、加賀百万石の基礎として、改作法に基づく封建体制の確立を中心にとりあげる。ここでは、対幕府政策を芳春院の人質、藩内政策を改作法でとらえさせる。村御印や村方二日読の資料なども含め、子供たちがよく理解できる資料づくりの工夫が強調された。次いで、ゆきづまっていくな加賀藩のようすをおさえるため、前半を天保義民にみられる農民の苦しい生活を中心にとりあげる。ここでは、子供の見学に先立ち、関係文献の著者をも訪ね、当時の農民の生き方に可能な限り近づき、ふれることの大切さが指摘された。また、農民の生活のようすを劇画化したスライドで、豊かにイメージ化することも強調された。後半では、台頭する商人の力を銭屋五兵衛を中心にとりあげる。ここでも商人の活躍や力がイメージ豊かに描ける資料の必要性が指摘された。なお、商品経済の流通については子供の発達段階を考慮して、商人を通し

受領書

を主としてキーワード法で、情意の評価はイメージアップの方法で、また、概念把握の評価をイラスト法で行うことにした。

住所名

教育学部 第8号

(鹿島郡)
 能州能登郡坪川村物成之事
 壹ヶ村草高 内拾石明曆貳年百姓方の上ルニ付無検地極
 一、貳百七拾貳石
 免五ツ七歩、内四厘明曆貳年の上ル
 右免付之通新京升を以可納所、夫銀定納百石ニ付
 百四拾目充、口米石に壹斗壹升貳合充可出者也
 同村小物成之事
 一、六拾五匁 山役
 一、五拾壹匁 苦竹役
 一、壹匁 鳥役
 出来

(「加賀能登の歴史」より)

加賀守松平定房殿
 五萬石分、船頭水主
 本殿奉、天代渡御、若御
 異儀有御満者也
 加賀守相模
 弘化三年月日 里見玄三郎
 後人申

(村松七九氏藏)

2 活用した資料（主な資料）

(1) 加賀藩の大事業——芳春院の人質

利家のなくなったその9月、加賀百万石を大もとからゆさぶるような大事件が起きました。豊臣秀頼と徳川家康との間に危機のせまった時、どこから出た話か「前田利長は、天下をとろうと考えて、城をりっぱに手入れしたり、ヤリや鉄砲、刀などをたくさん買い入れ、いくさの用意をしている。」といったうわさが広まり、家康の耳にもはいつてきました。

家康はまっていたとばかり、すぐに利長をうつための兵をさしむける用意をはじめました。この話を聞いた利長の心配は、世の中が徳川氏の天下へと動いている時だけにたいへんなものでした。

すぐに重臣を家康のもとに派遣して申し開きすることにしました。大阪に行った重臣はいつまで待っても家康にあえませんでした。あちこち親しかった大名たちをたずねて、申し開きのできることを頼みましたが、家康の力がいちだんと強くなった今では、だれの力もおよばなくなっているの知らされるばかりでした。

一ヶ月半も待たせて、やっと家康に会うことができました。重臣の態度と利長の手紙でやっと家康はなっとくしたようでした。しかし、「ことばだけではわからない。利長に二心のないしようことして、利家の妻の芳春院を人質に出すように。」との一言で、芳春院は江戸へ送られることになりました。

芳春院は人質となることを承知し、15年にわたる気苦勞の多い江戸での生活をおくることによって、前田家が加賀藩をおさめる土台をきずいたのです。人質として大名の妻子が江戸に住まわされる制度がつくられたのは1634年ですが、芳春院はその最初の人だったのです。

（「子ども石川県史」より）

(2) 前田家の参勤交代のようす

文政8年（1825）13代齊泰が江戸へ向かった時の記録では、日数は12泊13日でした。これが

ふつうだったようです。

この道中を、大勢の家来を引きつれ、行列をととのえて行進するのです。しかも、前田家は百万石という大大名ですから、行列の人数も五万石や十万石の大名とはくらべものになりませんでした。

従者1,974人、馬54匹となっています。従者は8,900人は荷物をかつぐ人たちです。殿様はかごに乗り、身分の高い武士は馬に乗りました。かかった費用は15,000両（15億円程度）といわれる。

（「金沢の歴史」より）

(3) 改作法

改作法とは、村々の田の良し悪しや広さを調べ（検地）その村の米のとれ高をきめ、それを四公六民（四割を税に出す）をもとにして村の税を決めたのです。その年の実り具合を調べて税を決めるこれまでのやり方をかえて、豊作不作にかかわらず定まった税をとり立てる方法を実施することにしたのです。

また、それまで武士が直接百姓から税を取り立てていたのをやめさせ、百姓から藩に納めさせるようにしました。年貢米の直接責任者は百姓の中から（十村＝加賀藩だけの呼名、他藩の大庄屋にあたる。数十村を合せた組の責任者）選び、これまでの武士の代官は廃止しました。

（「子ども石川県史」より）

(4) 二日読きむらいのおもな内容

1. 百姓から侍・男人に手紙を出してはいけない。
1. 着るものは、木綿もめん・布のほかはきてはいけない。
1. 食べものは、つねに雑ざつこくを食べ、米をみだりに食べてはいけない。
1. 馬やかごに乗のりってはいけない。
1. 他国のものと結婚けっこんしてはいけない。
1. 村の人を他国に出してはならない。
1. 村で酒や菓子あじをうってはいけない。

(5) 天保義民の碑（立札）

天保年間の大ききんは、ついに農民も町人も餓死（うえじに）するもの続出の惨状（ひきんな状態）を呈した。加賀藩は、改作仕法により、凶作にもかかわらず苛酷（ひどい）な上納米を強要することを改めず、天保9年、下安江村、西念新保村、南新保村等、28ヶ村連名にて年貢米の減免（税をへらす）を願い出たが、かえって残酷な拷問を受け、多数はその強要に屈したが、右の三ヶ村の代表15名は、最後まで嘆願（お願い）し続け、大衆を救うため罪を一身に引き受け従容（あまんじて）として処刑された。

これが為政者（政治をする人）に深き反省をもたらし、働く農民の尊さを全土に教えたことは、実に大いなる功績である。

明治30年、勝海舟先生は、大書して天保義民と名付けた。

天保義民顕彰会
（駅西中央公園立札より）

(6) 加賀藩の主要な不作・凶作年表

天保元年	不 作	
2年		
3年	不 作	
4年	凶 作	旱ばつ (稲の育成期に雨が降らず) (水不足になること。ひでり)
5年	凶 作と疫病流行	(はやり病・悪い病気)
6年	豊 作	
7年	大凶作	冷害(寒さにより稲のほが 実らないこと)で、うえ 死するもの続出。
8年	凶 作	台風がおそい出水する
9年	大凶作	いなご・うんかの大発 生⇒天保の義民の事件
10年	凶 作	

(「加賀能登の歴史」より作成)

(8) 銭五家支店の図



(郷土資料館「銭屋五兵衛」より)

(7) 加賀藩と商人

天保15年(弘化元年)9月幕府は財政難のため、加賀藩へ8万両借用の申込みがあったので、藩では家臣並に富裕町人から都合してもらうこととし、御かね裁許役の銭五が調達の任務に当った。町人側の銀割は木谷藤右衛門は三百貫目、嶋崎徳兵衛は二百五十貫目、銭屋喜太郎は二百貫目、木屋次助、綿屋彦九郎、能登屋三右衛門、木屋孫太郎、紺谷三郎兵衛は百五十貫目、越中屋久左衛門、丸屋伝四郎、小酒屋半左衛門、田中屋弥兵衛は百貫目、小泉屋太三郎、丸屋伝右

衛門は七十貫目、中神茂兵衛は六十貫目、桜屋理兵衛は五十貫目、熊田屋八郎兵衛、角屋九兵衛、魚屋、熊田屋吉左衛門、尾山屋、橋本屋寛次郎の六人で三百二十貫、黒島の浜岡屋三右衛門は百五十貫、総計二千六百二十貫目を調達し、外に前記23人から冥加金として銀五百枚を差出した。藩では五兵衛らの奇特な志を賞する所があった。

銭屋五兵衛 喜太郎

(鏑木勢岐著「銭屋五兵衛の研究」より)

(9) 銭屋五兵衛略年表

年代	西暦	年令	記	事
安永2	1773	1	五兵衛(幼名茂助)加賀国宮腰(金石)に生まれる。	
寛政元	1789	17	家業(質業)を相続する。	
〃 11	1799	27	高田屋嘉兵衛エトロフ航路を開く。	
享和元	1801	29	宮腰本町組合頭(肝煎の補佐役)になる。	
文化8	1811	39	質流れの古船(120石積)で海運業を始める。	
〃 11	1814	42	御用金を課せられる。(銀9貫目)これ以後たびたび御用金を上納する。	
文政8	1825	53	会津藩とろうそくの取引きを始める。	
〃 9	1826	54	輪島屋与三兵衛と共同で輪通丸を購入する。	
天保元	1830	58	宝銭丸を大阪で新造。以後、100余艘に上る船を次々に新造購入する。	
〃 4	1833	61	加賀藩の船舶の調査課税に関する役に任ぜられる。	
〃 5	1834	62	南部藩・津軽藩御用となる。この後、両藩に対してもたびたび御用金。	
〃 11	1840	68	御用金10万両上納する。	
〃 12	1841	69	加賀藩より三人扶持を給せられる。	
〃 14	1842	70	加賀藩御用船の主任役になる。	御用船常安丸を建造。
〃 14	1843	71	加賀藩の御用金の主任役になる。	(960石)
弘化元	1844	72		御用船常豊丸を建造。
〃 3	1846	74	銭屋五兵衛の御用船永代渡海を諸国に布告。 十村格に列し、名字帯刀を許す。	(1539石)
嘉永元	1848	76		
〃 2	1849	77	河北潟埋立を出願する。	
〃 5	1852	80	銭五とらえられる。 銭五牢死する。	

(郷土資料館「銭屋五兵衛」より)

IV 単元構成と授業展開

(例1) 金沢市立長田町小学校

1. 単元構成にあたって

室町時代の学習では、地域素材として「一向一揆」を取り上げ、「百姓の持ちたる国」が100年近くも続いたが、その後、「信長、秀吉」によって強固な封建体制が確立されていったことを学んだ。この意識をさらに発展させるため、江戸時代の学習では「加賀百万石」をテーマに、改作法、天保義民、銭屋五兵衛を地域素材として取り上げることで、加賀藩が外様の

大名として封建体制を支えてきたことを学ばせたい。

長田町小学校は金沢駅の北西に位置し、校下には金石街道(旧、宮腰街道)が通り、天保義民、銭屋五兵衛についても小さな頃から耳にしている。そのため、「身近な遺跡を調べる」学習においても調査対象とした。

授業は長田町小学校6年1組(石田学級)、2組(林学級)、3組(安藤学級)の計95名を対象とし、自分の足で調べる学習を好むことから見学・調査をもちこんだ単元構成とした。

2. 学習計画(総時数11時限)

第1次 改作法にもとづく封建体制の確立

…………… 3時限

	学 習 計 画	中 心 資 料
第 一 次	<p>○外様大名としての加賀藩はどんな生き方を考えたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・芳春院を人質に出した藩の立場について考える。 ・改作法、村御印を手がかりに藩の農民支配のようすを調べる。 ・二日読みを手がかりに農民の生活を想起する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前田氏の勢力拡大地図 ・参勤交代(文章資料、絵図) ・大名配置(OHP) ・村御印(実物複写) ・改作法(文章資料) ・十村のしくみ(OHP) ・税の種類(文章資料) ・農民生活条例(文章資料)
	<p>幕府に対しては人質を出して従い、自分の国を強くするために年貢を多く集めようとして改作法を実施した。そのため農民は苦しい生活を強いられた。</p>	

第2次 天保義民にみられる苦しい生活

…………… 4時限

第 二 次	<p>○生産力が向上しているのに農民が一揆をおこしたのはどうしてだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・西念寺公園を見学して天保義民のいわれを調べる。 ・夏休みの一人一研究例を資料として一揆の概要を調べる。 ・農民が一揆をおこしたきっかけについて考える。 ・スライド番組を視聴して拷問に耐える農民の気持ちを想起する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・天保義民の碑・立札の見学 ・「天保義民と加賀藩の農政」(個人研究) ・凶作年表 ・生産力の向上(グラフ) ・藩の財政の変遷(OHP) ・江戸城焼失と負担金(文章資料・イラスト) ・物価の高騰(グラフ・OHP) ・天保義民(スライド) ・天保義民物語(文章資料)
	<p>農民は生活苦に耐えかね藩にうったえたが、藩の財政も苦しく願いはしりぞけられた。そしてますます農民から厳しい税のとりたてを行った。</p>	

第3次 台頭する商人……………4時限

第 三 次	<p>○加賀藩はどのようにして苦しい財政を切りぬけようとしたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・銭五会館を見学し、人物調べをする。 ・銭五の活躍について一人調べる。 ・北前船を中心に銭五がどのようにして力をつけてきたかを調べる。 ・苦しい財政に悩む藩のようすを調べ、武士の世の中がどう変わってきたかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・銭五会館の見学・館長からの聞きとり ・銭五の活躍(文章資料) ・北前船・航路(スライド) ・五兵衛年表 ・武士の生活(文章資料) ・藩の借金(グラフ) ・御用金と加賀の豪商(表) ・借金のようす(イラスト)
	<p>藩は苦しい財政を切りぬけるため、商人から借金をせざるをえなくなった。そのため商人の力は強まった。</p>	

3. 授業をふりかえって

① 資料について

- 1次中の2時で村御印の複写を全児童に配布したところ、児童には大変な感動を与えた。文字は読めなくても生の資料の必要性を感じ

た。

- 1次中の3時で「二日読み」をもちいて農民の生活状況をとらえさせようとしたが、室町時代との比較より現在の生活との比較へと流れてしまい、改作法との関係考察はあまかった。
- 2次中の4時では、戸板公民館所有の「天保

図表-1 第1次中の1時のコミュニケーションプロフィール

学習活動	教 師									児 童						
	9	8	7	6		5	4	3	2	1	10	11	12	13	14	15
	批判・注意	指示・指名	講義・説明	発 問			単 純 質 問	K・R		単 純 反 応	自 発 発 言			沈 黙 ・ 作 業		
別 の 視 点				根 拠 ・ 理 由	自 分 の 考 え	知 的		情 的	資 料 か ら		自 分 の 考 え	付 け 加 え	質 問 ・ 反 対			
1. 利家の生き方をどう思うか																
2. 資料をもとにした利家に対する見方																
3. 家康はどう思ったか																
4. 芳春院を人質に出した気持ちをふき出しにかく																
5. まとめ																

義民」のスライドを再構成して視聴させたところ、イメージが情意方向にふくらんだ。

② 見学、調査について

- 2次中の1時と2時は天候の関係で入れ替え、一人調べの後、「天保義民の碑」の見学に出かけた。気にもとめずに遊んでいた公園の片隅に農民の涙の結晶が建てられていたことに感動し合うなど行動化へとつながった。
- 「銭五会館」への見学・聞きとりは授業としては行えなかったためスライド見学とした。しかし、授業後自主的にここをおとす館長「清水(銭屋)五兵衛」からいねいな説明を聞いたものが95名中82名にも達した。なかには墓をたずねたり、記念塔まで出かけたグループもあり、「知りたい」・「みたい」という行動をよびおこす教材であった。

③ コミュニケーションプロフィールについて

(図表-1 第1次中の1時のコミュニケーションプロフィール)

(図表-2 第1次中の1時のコミュニケーションのカテゴリー分析)

11時限の授業の中から6時限についてビデオ撮りし、そのコミュニケーションプロフィールをもとにカテゴリー分析を行った。この図は1次中の1時のコミュニケーションプロフィール(図表-1)をもとにカテゴリー分析(図表-2)を行ったものであり、6時限のプロフィールの形態上の平均値に最も近いものである。

- 8-指示・指名が全コミュニケーションの26%を占めている。このように制御が強くなったのは、提示される資料についての教師の補足説明が大きなウエイトをしめ、その資料を読解したものだけの発言がめだつ結果となった。

図表-2 第1次中の1時のコミュニケーションのカテゴリー分析

カテゴリー		学習活動					
		1	2	3	4	5	
教 師	1 K・情 情的	3	0	1	0	0	4
	2 R 知的	7	7	3	4	1	22
	3 単純質問	0	0	10	0	0	10
	4 発 自分の考え	2	1	0	3	1	7
	5 問 根拠・理由	1	1	0	3	0	5
	6 別視点から	0	2	1	0	0	3
	7 講義・説明	7	6	11	11	7	42
	8 指示・指名	9	9	23	8	6	55
	9 批判・注意	0	2	2	1	0	5
児 童	10 単純反応	0	0	6	4	0	10
	11 自 資料から読取り	0	0	4	0	0	4
	12 発 自分の考え	1	7	7	6	1	32
	13 言 付け加えて	0	1	0	0	0	1
	14 質問・反対	0	0	0	0	0	0
	15 沈黙・作業	0	1	9	1	2	13
		40	37	77	41	18	213

●7-講義・説明が全体に多いのは、教師側から提出される資料が児童の収集資料より多いために、路線を走るような授業パターンが多かったといえる。

このことから、資料に対する感動・発言は受身的となり、児童が行動によって収集した資料が授業の中で十分いかされない結果となった。しかし、資料は生々しく解釈が即、興味をかき立て行動化へとつながるなど、身近な地域にある素材ならではの主体的な行動を可能にした。

(例2) 金沢大学付属小学校

1. 単元構成の留意点

地域教材として「加賀百万石」を取り上げたのは、この教材を通して、江戸時代における封建支配体制の確立から崩壊に至るまでの世の中の大きな変遷を理解させることができると考えたからである。いいかえれば、加賀百万石にスポットを当てて学習することが、日本の歴史の

流れを学ぶことにも通じると考えたからである。

また、子供の側からみた場合、学ぶ意欲をかきたて興味や関心を持続させながら、主体的な追求学習が期待できると思われたからにほかならない。

加賀百万石を教材化するにあたり、次の点に留意した。

- ① 加賀藩の財政を柱にして単元を構成する。
- ② 改作法の取り扱いは、改作法の実施前と後における農村の立て直しに視点を当てて単元構成する。
- ③ 歴史的遺跡の見学は課外のひとり学習活動にまかせるが、他の資料は、文章資料を中心にスライド、TP等の視聴覚教材の利用と図書室の活用を考える。
- ④ 子供の側に立った授業を行うため、カードに自分の考えを記録させて、子供の思考の流れを探る資料にする。また、授業記録と感想を印刷して子供に配布し、学習意欲の促進と持続に役立てる。

2. 単元構成(総時数12時限)

第1次 改作法に基づく封建支配体制の確立

1	<p>○外様大名である加賀藩は幕府に対してどんな考え方や態度で望んだか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・加賀藩の大事件について調べる。 ・加賀藩は幕府との間に起こる問題から自分をどのように守ってきたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・芳春院人質(文) ・幕府と外様大名との関係(図)
2	<p>○加賀藩は自分の国を守るために何をしたのだろうか。——改作法の実施前。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦国時代を経験した農村の状態を調べる。 ・農民の苦しい生活を救うのに何をしたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・改作法実施前の農村(文) ・改作法の実施にあたって(文)
3	<p>○加賀藩が実施した改作法とは何だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・改作法について調べる。 ・検見法から定免法にしたのはなぜか 	<ul style="list-style-type: none"> ・利常の改作法
4	<p>○加賀藩はなぜ改作法を実施したのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・村御印について調べる。 ・農民からどれだけ年貢を取り立てたのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・村御印(実物大) ・村の年貢のわり合い(表)

第2次 天保の頃の苦しい加賀藩

1	<p>○天保義民とは何をした人たちだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天保義民について調べる。 ・学習課題をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・天保義民のスライド
2	<p>○藩は不作だとわかっていて、なぜ平年作としたのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・藩が農民の減免要求をかけたわけについて調べる。 ・加賀藩は苦しかったのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・天保義民のシート
3	<p>○藩は苦しかったか、苦しくなかったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天保の大ききんについて調べる。 ・藩の財政状態について調べる。 ・どんな困ったことがあったのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・凶作年表 ・天保の大ききん ・藩の財政(表) ・参勤交代 ・幕府の要求
4	<p>○天保の頃はどのような世の中だったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのような世の中だったか調べる。 ・幕府の財政状態はどうだったか調べる。 ・幕府と藩の関係はどうなったろうか。 	

第3次 台頭する商人とゆきづまる加賀藩

1	<p>○加賀藩は苦しい財政を切りぬけるために15万両をどのように用意したか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・藩は困ってどこに救いを求めたか調べる。 ・なぜ商人から集めたか調べる。 ・銭屋五兵衛はなぜ大金を差し出したか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・藩の収支表 ・銭五のスライド ・藩の危機を救った銭五(1)
2	<p>○銭五はどのようにして大金を差し出す気持ちになったのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大金を差し出した銭五の考えを調べる。 ・当時日本は外国と貿易できなかったか。 ・銭五の目的はどこにあったのだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・藩の危機を救った銭五(2) ・銭五の密貿易説
3	<p>○銭五はどのようにして豪商になったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・銭五のおいたちについて調べる。 ・北前船で商売を広げた銭五を調べる。 ・どのようにして大商人に成長したのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・銭五年表 ・北前船 ・渡海免状
4	<p>○加賀藩の苦しみはなくなったのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どうにもならなくなった財政難の原因について調べる。 ・お金の苦しみはなくなったのか。 ・とのさまのおひざもとにおこった泣き一揆について調べる。 ・ゆきづまった加賀藩はどうなるだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年表(凶作・幕府の要求) ・財政収支表 ・泣き一揆 ・藩のうちこわし

3. 単元展開と考察

＝改作法を子供達はどのように理解したか＝

次の表は、1次の3時と4時の子供の思考の変容を表わしたものである。

課題 子どものとらえ方		3 時	4 時
		何故定免法にしたか	何故村御印を出したか
藩	決まった年貢を納めさせるため	9	15
農	良い政策	15	0
民	悪い政策	9	23

3時の学習で、改作法は農民にやる気を起させるために実施したと受けとめる者が15名もいた。定免法は豊作の時に農民の余剰米が多くなるから有利に働く政策であると考えたのである。

しかし、その中でも「これで農民は安心した生き方ができるのか」と疑問を抱く者がある。

農民にとって悪い政策であるとする9名は、不作の時困るという意見である。この結果からみると、この時間は改作法の実施方法について理解させることができたが、改作法の意図について理解させることは十分できなかつたと考える。そこで4時は、村御印の資料からねらいにせまることにした。実物大の村御印を手にした子供たちは、感動するとともに厳しい年貢のきまりに驚いた。その結果、3時で改作法は良い政策であると受けとめていた子供たちが全員考えを変えたのである。「すごく重い税だな。農民はいつまでたっても苦しみからのがれられない」という子供の感想を見ても改作法実施の目的が理解されたと考えてよい。

＝天保の頃の苦しい加賀藩を子供たちはどのように理解したか＝

加賀百万石はその名が示す通り豊かな財産を持ち裕福な暮らしをしていたと思っている子供たちは、資料「天保の大ききん年表と大ききんのようす」により、加賀藩は苦しい財政状態におちいり困っていたと考えを変えたのである。更に、藩の収支状況資料から困っている原因が

参勤交代制度、幕府からの多額の上納金命令という幕藩体制のしくみがあることに気づいたのである。そして、天保の大ききんの影響により幕府も困っていたことがわかり、天保の頃は、「農民も藩も幕府もそれぞれ立場は異なるが困っていた」つまり、困難な世の中であったという時代認識に立ったのである。しかし、商人については、力を持ってきてぜいたくな生活をしてた一部の子供は予想している。また、このあとの世の中に思考をめぐらし「この頃は全国が揺れ動いていた。そのあとすぐ幕府がつぶれた。なんとなく不思議に思った」とのべ、地方史の学習から中央史の動きに視点を広げて疑問を投げかける者もいた。歴史を見る目が育ったわけである。

＝台頭する商人とゆきづまる加賀藩を子供たちはどのように理解したか＝

加賀藩は苦しい財政危機を乗り切るために、商人からの借金に救いの道を求めたことを子供たちは理解することができた。だが一部の者は「頭をさげてまで商人から借金をしたとは思わない」とこだわりを示し、拷問という手段に訴えてまでも無理して農民から年貢を取りたてたとのべている。

錢五が大金を差し出した意図については「自分から協力して藩を助けた」「御用船を手に入れるため」「密貿易をするため」などの意見が出され、追求の視点が密貿易に向けられたのである。単元計画の際、密貿易という歴史的事実について取り扱うことなど考えていなかった。しかし、錢五と密貿易との関係を追求していく過程において、当時の世の中は鎖国によって外国と貿易することがゆるぎされていなかったという事実を理解することができたのである。

三次の学習を終えた後、子供たちは次のような感想を書いている。

- 決して藩は苦しみから解放されなかつただろう。(O男)
- この頃は、士農工商といっているけど、商工士農といった方があっていと思う。(N男)

- 加賀藩の苦しみはまだあった。江戸幕府がつぶれかけているが、その影響が加賀藩になかったかということである。(K子)
 - もう江戸時代も終りごろだし、そろそろ幕府もほろびるころ。幕府がほろびると藩も苦しみはなくなる。(N子)
- 以上の感想をみると、子供達は今後の加賀藩の行方に関心を示していることがわかり、この関心を足場に幕府体制の崩壊、開国、倒幕へと学習を進めることができると考えられる。

4. 地域教材を素材とした結果

- 学習を終えて地域教材を取りあげた有効性について気づいた点を列挙すると、次のようになる。
- 加賀百万石について抱いていた見方が、この教材を通してより深く広い視野からながめれるようになった。
 - 加賀藩の歴史的な推移を豊かなイメージで描くことができるようになった。
 - 本単元の追究過程において利用した資料は、

(表1. 知識・理解に関する評価結果)

下の表で、左側のことがらと結びつきの強いと思う要素を選び、その順番を書き入れましょう。

要素 ことがら	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	幕府	外様大名	芳春院・人質・参勤交代	改作法	村御印	村方二日読み	ききん	物価高	一揆	天保義民	農業技術・生産力の高まり	江戸城が燃える	藩の負担金	苦しい藩の財政	農民の苦しい生活	きびしい税	銭屋五兵衛(御用商人)	力のある商人	借金
A.外様大名	74.7	0.0	57.3	4.7	0.7	0.0	0.0	2.0	1.3	1.3	0.0	15.3	4.0	13.3	0.7	2.7	5.3	2.0	11.3
B.改作法	10.7	6.0	2.7	2.0	28.0	6.0	6.7	6.0	2.7	11.3	12.7	0.0	0.0	6.7	26.7	41.3	0.0	0.0	4.7
C.二日読み	3.3	9.3	1.3	22.0	30.0	6.0	4.0	6.7	7.3	6.0	6.7	1.3	0.0	1.3	42.7	34.0	0.0	2.0	4.0
D.一揆	3.3	2.0	0.0	20.7	8.7	1.3	28.7	8.7	0.7	23.3	1.3	1.0	0.7	0.0	34.0	45.3	0.0	0.7	8.0
E.力のある商人	10.0	10.0	1.3	2.0	0.0	0.0	0.7	4.7	0.0	0.0	1.3	8.7	18.0	31.3	0.7	0.7	83.3	3.3	12.7

上段…加重平均(%)

下段… 80%以下 60~80% 40~60%
 20~40% 10~20% 10~未満

地域資料が中心である。しかし、地域資料で不十分な場合や不足している場合に、それを補うために全国資料が子どもたちの手によって取りあげられた。

- 改作法を理解させるのは難しいと思った。子どもたちの視点は農民の立場に向きやすく、そのために、改作法は農民にとってきびしい税制であったと受けとめる子が多かった。また、中には、加賀百万石はぜいたくをするために農民から過酷な税をとりたてたと理解している子がいた。藩の財政基盤を固めるために実施した政策が改作法であると子どもにわからせるのは、内容や資料の検討が必要であると考えた。

最後に、学習終了後書いた感想の中から地域教材の学習について次のように語っている。

- わたしたちの住んでいる石川県のことがいろいろわかったので、とても楽しかった。
 - これから後、農民たちはどうなるのか。藩は、幕府は、どうして今のような政治になったのか。もっとよく勉強していきたい。
- 子供達のさめた目で日本の行方を言いあてているようで、まさしく至言である。

(例3) 金沢市立野町小学校

1. 単元構成するにあたって

本学級では室町時代の学習を一向一揆を主教材に展開してきた。一向一揆は郷土の代表的な歴史事象であると考えからである。さらに、一向一揆にみることが出来る庶民の台頭は、この時代は中央の政権が揺らいでいたことを物語っており、室町時代の特色を示めしていると考えたからである。

児童たちは一向一揆の学習をすることで、郷土の先人の生きざまに関心を持つようになってきた。また、地域の歴史を学習することで中央の歴史をみるという見方もかなり身につけてきた。その児童たちに江戸時代の学習も地域素材を中心に学ばせることは効果的であろうと

考え、単元「加賀百万石」を計画したのである。

郷土の加賀藩は、幕藩体制の中に位置づけられた百万石の大藩であると同時に外様大名として、幕府との関係の上で、特異な動きをしていた。加賀藩の生き方を学ぶことは、江戸を中心とした幕藩体制を明らかにしていくことにつながると考える。郷土の人々の生き様にも加賀百万石の宿命が重くのしかかっており、時には人々を苛酷な生活に追い込むこともあった。加賀の農民を通して、江戸時代に生きた農民たちの生活ぶりや考え方に気づかせることができると考える。

このような考え方に基づいて、近世の数多い資料の中から、天保義民と銭屋五兵衛を中心素材として選んで単元を計画した。さらに、加賀藩の立場や政治のやり方を明らかにするために芳春院の人質事件や利常の改作法も素材としており込んで、単元構成とした。

単元「加賀百万石」を児童の意識に合わせて、4つの小単元に分けて構成した。

第1小単元「加賀百万石の立場」(2時限)

第2小単元「農民を苦しめる加賀藩」(5時限)

第3小単元「商人の台頭と弱まる加賀藩の力」(3時限)、まとめ(1時限)である。

詳細は以下を参照されたい。

小単元	学 習 過 程	資 料
農める加賀藩を苦しめる	<p>武士は自分が生きぬくためにあんなに農民を苦しめてまで年貢をとりたてた。</p>	
商人の台頭と弱まる加賀藩の力	<p>○商人はどのようにして力をつけたのか。 加賀の豪商「銭屋五兵衛」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・回船業、密貿易で多額の金をもうけた。 ・加賀藩にお金を貸す。 <p>○銭屋五兵衛をはじめとする商人は、加賀藩になぜお金を貸したのだろう。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>武士がこわい</p> <p style="text-align: center;">武士を利用して 多くのお金を手に入れる</p> <p>商人たちは自分の努力次第でたくさんのお金をもうけることができ、武士を上回ることができるという夢をもっていた。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・銭屋五兵衛 (スライド) ・五兵衛の年表 ・銭屋五兵衛(文) ・御用金と加賀の豪商 ・五兵衛の願い(文)

3. 指導を終えて

加賀藩の立場を明らかにすることで、幕藩体制の世の中を児童たちにつかませようとした。実際の授業場面において次のような反応がみられた。

- T 幕府は前田をどう思っていたか。
- P₁ 幕府は前田がたくさん領地をもっているの味方にしようと思っていた。
- P₂ 味方にするのなら外様大名にしておかないと思う。幕府は前田を信用していなかった。
- P₃ 信用していないと思う。何とか力を弱めようと思っていた。
- P₄ 幕府は前田の動きをキャッチしたかった。動きがでいで、つぶそうと考えていたと思う。
- P₅ 金を使わせたいと考えていた。
- P₆ 前に秀吉側についていたので、信用されていないと思う。
- P₇ 幕府も不安だったのだ。それで、親藩・譜代・外様大名に分けたり、お金をいろいろと使わせる工夫をしたのだと思う。

このように児童たちは、幕藩体制を強めようとする幕府の姿を外様大名である前田との関係に目を向けることで、次第につかんできた。さらに、幕藩体制の世の中を生きねばならなかった加賀藩の立場についても、芳春院の人質事件や参勤交代の学習を通して理解が深まった。

また、江戸時代の農民の生活や商人の台頭についても天保義民や銭屋五兵衛を素材にした学習で、次のような反応がみられた。

- P 室町時代は下剋上で武士たちひとりひとりが信用されていませんでした。江戸時代は室町時代とくらべて信用もでてきて、チームワークもよくなったと思う。だから農民たちは一揆をおこせる状態ではなかった。
- P 武士たちは江戸時代の終わり頃になると商人からお金を借りていた。利子がつくとそれだけ商人たちは力をつけ、武士はだんだん貧乏になっていったのだ。

以上のように、加賀藩の立場の学習を基盤に農民、商人の生き様へと学習を展開していった。

V 評価

1. 知識・理解の評価

(1) 評価のねらい

この評価のねらいは、「加賀百万石」の内容を児童がどの程度把握しているかを明らかにすることにある。まず、単元構成段階で目標をわけて以下の5つの評価項目を設定した。

- ①外様大名として、幕藩体制に組み込まれた
- ②改作法によって、農民たちを支配した
- ③二日読みにみられるように、農民の生活は苦しかった
- ④あいつぐ凶作、物価高が一揆をひきおこした
- ⑤商人は莫大な財を築き、藩の財政を援助した

(2) 評価の方法

①評価問題作成の方法

評価問題作成の手順は次の通りである。まず総時数11時限の指導計画の中から、目標を達成するのに必要と思われる要素を選び出した。例えば、「幕府」「改作法」「一揆」等である。

次に、要素の中で上記の5項目にあたるものをことごとくとして抜き出した。こうして、たて軸にことごとく、横軸に19の要素をもつマトリックス(表一 参照)を作成した。

②評価の方法

児童に、たて軸のことごとくと結びつきの強いと思われる要素を選ばせ、結びつきが強いと思われる順に1. 2. 3...と番号をつけさせた。

児童に選ばせた要素を各ことごとくにつき上位3位までをとり、加重平均した。このテストは野町小学校1クラス、長田町小学校3クラス、金沢大学附属小学校1クラスで行った。加重平均をするにあたり、各学校の各クラスからアットランダムに10名ずつ抽出し、サンプル数を50としてデータをとった。

(3) 結果

結果は表一の通りである。特に結びつきの強いものとして、以下のものがあげられる。

A. 外様大名——1、幕府

A. 外様大名——3、芳春院、人質、参勤交代

B. 改作法——16、きびしい税

C. 二日読み——15、農民の苦しい生活

D. 一揆——16、きびしい税

E. 力のある商人——17、銭屋五兵衛
(御用商人)

(4) 考察

評価のねらいに掲げた5項目に関していうならば、それらはほとんど児童に把握されたといえてよい。

この調査結果から気づくこととして以下のことがいえる。児童の思考の中で、1つのことがらに関連する要素が比較的分散する場合と比較的集中する場合がある。ということである。関連する要素が分散することがらに、B. 改作法 C. 二日読み、D. 一揆があげられる。これらの3つのことがらは、農民の生活に関するものであり、児童は江戸時代の農民の生活を様々な角度からとらえていったのではないかと考えられる。

これとは逆に、関連する要素が比較的集中したことがらに、A. 外様大名、E. 力のある商人の2つがある。A. 外様大名の場合、幕府との結びつき、参勤交代にみられる幕藩体制という点からとらえた児童が多かった。

要素の中で強烈な印象を児童に与えたのが、銭屋五兵衛である。E. 力のある商人=銭屋五兵衛という図式ができたようである。E. 力のある商人、ということがらを設定した段階では、幕府、外様大名、苦しい藩の財政、借金といった要素が分散的に結びつくと思われた。しかし、結果は見ての通りである。この原因については、まだ分析していないが、単に単元の後半で商人の台頭を取り上げたからという配時に関することよりも、銭五という人物が児童にとって魅力的な人物だったからではないかと思われる。

今一度言うならば、知識、理解の評価結果に関する限り、知識、理解面でのねらいはほぼ達

図 1

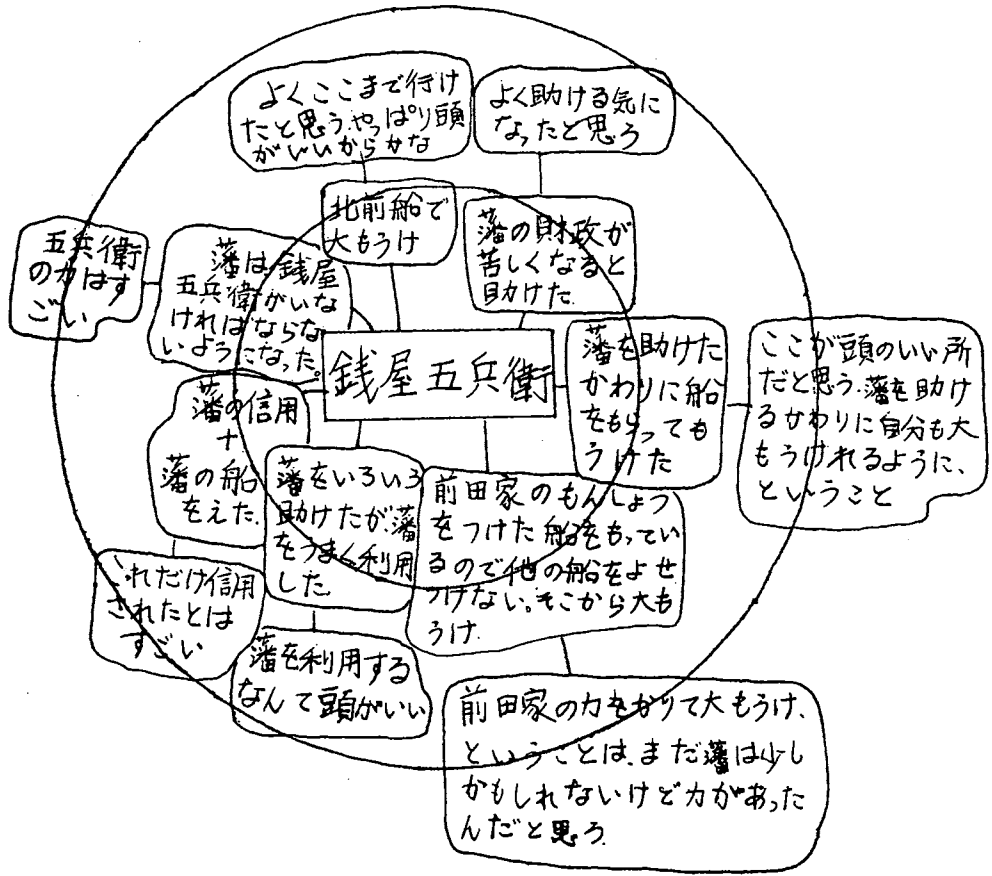


表 1

キーワード	銭 五	天保義民 (苦しい生活)	苦しい 藩の財政	改 作 法	外様大名	借 金	参勤交代	二日読み	江戸城焼失
人 数 (%)	45 (47.4)	23 (24.2)	6 (6.3)	6 (6.3)	5 (5.3)	2 (5.3)	2 (2.1)	2 (2.1)	1 (1.1)

図 2 感情の座標

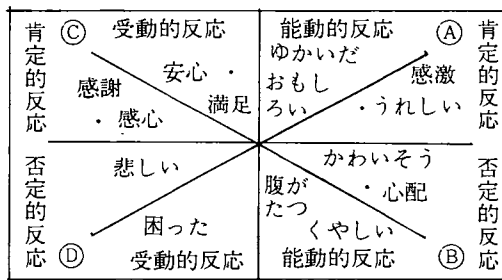


表2 (記述の多い 銭五・天保義民の分のみ)

銭屋五兵衛					天保義民					その他		
事実ワード	人数 (%)	感情座標				事実ワード	人数 (%)	感情座標				
		A	B	C	D			A	B		C	D
1. 御用金	20 (7.5)		1	18	1	1. ききん	19 (17.8)		10	2	5	2
2. 北前船	20 (7.5)			20		2. 減免	15 (14.0)	4	6	2	2	1
3. 藩の船を扱う	19 (7.1)		1	18		3. ごうもん	14 (13.1)		10	4		
4. 大商人	17 (6.4)			17		4. 物価高	10 (9.3)		6		3	1
5. 藩を助けた	15 (5.6)		1	14		5. 改作法	10 (9.3)		3	4	2	1
6. 支店を全国に出す	15 (5.6)			15		6. 二日読み	6 (5.6)		4		1	1
7. 海運業	14 (5.3)	1	1	12		7. 冷害・病虫害	6 (5.6)		3	1	2	
8. 十村役	13 (4.9)			13		8. きびしい税	5 (4.7)		4			1
9. 苗字帯刀	12 (4.5)			12	1	9. 流人	5 (4.7)		3		1	1
10. 河北潟埋立て	11 (4.1)		6	4	1	10. 苦しい藩財政	4 (3.7)			4		
11. その他	121					11. その他	13					
総数	266					総数	107					

(空欄は0人)

成されたといえよう。

2 情意の評価

(1) 評価のねらい

イメージマップにより、江戸時代のイメージを1つのキーワードで表現させ、そのイメージ構成の成分を評価する。

(2) 評価の方法

他の評価と同じ時間に図1(前頁)のように記入させた。(評価は、三クラス(95名)と多い長田町小の分をした。)

(3) 結果

長田町小の児童(95名)が挙げたキーワード別にまず分類した。(表1)

次にその事実ワード別に分類し、それぞれを感情の座標(図2)に位置づけた。(表2)

(4) 考察

表1の結果をみるとその生涯が極めて悲劇的であった大豪商銭屋五兵衛をキーワードに選んだ児童が半数近くも占めている。次いで農民の苦しい生活(天保義民などを含めて)が4分の1となっており、この2つでほぼ全体の7割余

りである。このことは、児童が銭五にしろ、天保義民たちに対して、強く印象づけられていることを示している。それらは、人々の生きざまの学習をしたために、藩関係のものとは比べて、感情移入が容易と思われる。また、その単元構成の後半に学習している小単元であり、本単元のような長い期間にわたる場合は当然終わりの記憶の方がより鮮明であるからと考えられる。

さらに、銭五の場合実在し、その資料もあり、銭五会館で調べたりした活動(自発的に)で共感を持ったのであろう。そして、天保義民の方も、碑が校下近くにあったことや、そのスライドを見たりして学習したことなども大きな要因になったものといえよう。

次に表2から銭五の方をみると、海運業で巨万の富を得た事実ワードに類するものが多く、藩に対する援助等も次いで多い。感情の座標の分類をみても、ほとんどCの肯定、受動的反応である。つまり、すごい力・商人・金持ちだ(感心した)という情意が大多数である。銭五の生涯は、波乱に富んだものであり児童の心に強引にアピールしたことがわかる。小さな商人か

ら加賀百万石を支えるくらいまでになった銭五の偉大さに感嘆すると共に、無実の罪に陥し入れられ、獄死したことに同情したのであろう。

一方、天保義民の方では、農民の苦しい生活の理由が数多く挙げられ、その情意は当然のごとく、かわいそう、腹が立つなどの否定、態動的反応で銭五と同様に感情を動かしたようだ。

残りの事実ワードの方も、同じような傾向になっており、児童の気持ちをゆさぶる指導といえる。しかし、加賀藩との相対的なからみはみられたが、藩自体の施政なりが児童の心をとらえず、今後その面からの資料の準備等が必要である。

3. イメージの評価

(1) 評価のねらい

「加賀百万石」の単元の学習を終えた後、児童は江戸時代に対してどのような認識を持つに至ったであろうか。あるいは、どのような要素を印象的に覚えていられるだろうか。

学校名 基本要素	長田町小 (6の1)	長田町小 (6の2)	長田町小 (6の3)	野町小	付属小
改作法	19	7	10	10	15
芳春院	4	7	4	0	3
二日読	7	11	3	1	0
前田利常	0	11	3	1	0
前田利家	0	1	0	1	3
加賀藩 (幕藩体制)	0	1	2	②④	3
新田開発	2	1	2	0	0
天保義民	③⑤	15	④⑥	21	25
一揆	0	3	1	1	0
区作	14	14	16	13	18
物価高	0	0	0	0	1
藩の財政	14	8	8	②⑥	②⑥
銭屋五兵衛	17	③⑦	23	20	31
密貿易	0	3	0	4	1
北前船	11	3	12	6	9
参勤交代	1	5	5	②⑦	1
その他	作物の絵 1	解体新書 4		身分制度 7	身分制度 4

単に知識・理解だけの面にとどまらず、情意の面をも含めた形で、児童の中に生じた概念形成の様子を少しでも測定しようというのが、この評価のねらいである。その際に、教師の単元のとらえ方、授業のすすめ方との関連性が重要な分析の視点になるのは言うまでもない。

(2) 評価の方法

前述のねらいから考えて、児童の抱いた概念をイラスト法で表出させることにした。調査問題は次の2つである。

- ① 江戸時代の学習を通して、もっとも心に残ったことを4コマのイラストに表しましょう。
- ② 4枚のイラストをもとにして、江戸時代を一言でいうとどんな時代になるか。1枚のイラストに書いてみましょう。

(3) 調査の結果

ア. 調査①について

もっとも心に残ったことを4コマのイラストにということ、いろいろな場面を書いているわけであるが、長田町小では4コマを1つのストーリーとして書いている児童も少なくはなかった。しかし、いずれにしても、1コマずつについて、基本要素と照らし合わせながら、どこに入るかを考え、統計処理をした。なお、○印で囲んであるのは、特に数の多かった項目である。

イ. 調査②について

基本要素との関連とともに、イラスト表現の方法についても、構造・比喩・象徴・並列といった類型に分けて、統計処理をした。

(4) 考察

2つの調査の結果から気づくこととして、次のことがいえる。

1つは、モデル案を共通のベースとして各校とも学習をすすめたのであるが、結果としてはそれぞれの学校の特色が如実に出てきていることである。

まず、長田町小の場合、天保義民・銭屋五兵衛と関連したイメージを描いた児童が多い。こ

地区	学校	身分制度	幕府交代	幕藩体制	藩財政	天保義民	商人の力
横	野町	■		■	■		■
	付属	■		■	■		■
	長田1	■		■	■		■
	長田2	■		■	■		■
比	野町	■		■	■		■
	付属	■		■	■		■
	長田1	■		■	■		■
	長田2	■		■	■		■
象	野町	■		■	■		■
	付属	■		■	■		■
	長田1	■		■	■		■
	長田2	■		■	■		■
並	野町	■		■	■		■
	付属	■		■	■		■
	長田1	■		■	■		■
	長田2	■		■	■		■
列	野町	■		■	■		■
	付属	■		■	■		■
	長田1	■		■	■		■
	長田2	■		■	■		■

■ 15以上 ■ 10-14 ■ 5-9 □ 0-4

これは、同校が天保義民の碑や銭五会館などと距離に近く、比較の見学しやすいことや親近感を抱きやすいことが原因と思われる。つぎに、野町小の場合であるが、加賀藩（幕藩体制）や藩財政の項目が多い。これは、加賀藩のようすとそれをとりまく中央の状況を結びつけて学習をすすめたからであろう。したがって、天保義民や銭屋五兵衛などは、幕藩体制に組み込まれた藩の財政の構造的な危機との関連において児童にとらえられていったと考えられる。付属小の場合は、天保義民・藩の財政・銭屋五兵衛の項目が、ほぼ平均的にとらえられている。これは各要素を確実にとらえさせようとした教師の姿勢や市内全域から児童が通学してきているという校区の関係によるものと考えられる。

また、表現形式の特徴をみると、表現しようとする項目によって、比較的集中しやすい形式があることに気づく。たとえば、幕藩体制・身分制度・藩財政・商人の力等の項目は、構造的なイラスト表現が多く、商人の力・藩財政といった項目は象徴的なイラスト表現が多い。なお、並列的なイラスト表現は、全項目にわたって多

いが、これは、低次の児童が表現しようとする時どうしても構造的・象徴的に描けないために生じる、いわば能力的な原因が大であると考えられる。

VI まとめ

前年度の研究（第7号）の継続として、本稿では「加賀百万石」にスポットを当て実践研究した。

前年度の研究素材「一向一揆」に比べ、研究員自身が教材の持っている本質の意味を把握しているのと・前号でその手順の要領を得ていたのが相俟って、効率的に研究を進めることができた。以下に本年度はつきりしたことを列挙して、その結びとする。

- (1) 加賀百万石の概要と性格については、研究員自身、現在の学問の水準に達するまで互いに学習し合い、正しく把握できた。このことは、研究推進に当って、極めて効果的であった。
- (2) 教科書教材と地域教材とを比較対象することにより、地域教材の持っている価値がより大きなものであることは、我々の仮説を裏づけてくれた。
- (3) 資料はできるだけ、児童にとってわかりやすいものとしなければならないが、時には生のものを提示することによって、児童に臨場感を与えた方が効果的である（村御印）。
- (4) 単元構成では、藩という1つの柱に対して農民・商人・幕府と横に密な構成をしたが、評価で見た通り効果的であった。しかも、商人では、銭五という1人物に代表させたことが、児童の理解と思考を助けるのに有効であった。

最後に、子供たち自身が、今現に生活している地域の学習をすることは、興味・関心を高め終始親近感を持って学習するものであることを実証することができた。この点は、歴史教育にとって大きな功績であることを付記して、本稿の結びとする。